眞人は夢を見ない：53～66. 2003
論　　文

眞人は夢を見ない

Zhēn rén doesn't dream

西林眞紀子
Makiko Nishibayashi

The analaysis concerns 'zhēn rén' of the ancients of China. Standing aloof from the world is described in the "Zhuàng zi（『荘子』）" scriptres. The men who have attained this state are called 'shèng rén' ,'zhì rén','shén rén' and 'zhēn rén'. Among these 'zhēn rén' most common in the "zhuàng zi". This was not found in literature before "zhuàng zi". 'Zhēn rén never dreams while sleeping and never worrise while awake' in the chapter 'Dà zhòng shī（「大宗師」）'. What does this allegory mean ?

The analaysis is about the characters 'Zhēn（眞）', about 'Zhēn rén（眞人）', about the characters 'Mèng（夢）' and about the relation between zhēn rén and dreams.

はじめに

本稿は夢と眞人の問題に焦點をあて、荘子の思想を分析したものである。『荘子』には、聖人・至人・神人・眞人などという、理想の境地に生きる超越者が見える。聖人は現實世界における理想者として描かれ、至人・神人・眞人などは世俗を超越した者として描かれている。なかでも眞人は『荘子』に多く見え、『荘子』以前の文獻には、ほとんど見當たらない。

特に注目したいのは、「大宗師」に「古の眞人は、其の寢ぬるや夢みず、其の覺むるや憂い無し」とあり、眞人と夢の關係が示されている點である。眞人が夢を見ないとは、どういうことか。夢を見ないということに、何か特別な意味が含まれているのであろうか。

このことを明らかにするために、まず「眞」字には、どのような意味が含まれているのか、次に「眞人」は、どのように描かれているか、最後に「夢」の字義を分析し、夢と眞人の關係はどのようなものか、について檢討する。

1．眞の字義

「眞」は、六經等の儒家系の資料には見えず、道家系の資料に頻出する語のようである[1)]。『荘子』では、人生の理想の境地について、あるいは眞實について述べた文章に多くみえ、また、天然自然の道や眞理、純粋などの意味で用いられる（資料１參照）。さらに、眞宰・眞性・眞僞などと熟され、眞の主宰者・本性・眞實という意味に使われる。すなわち、「眞」は『荘子』の際立った特色を示す語である。

では、一般的に見た場合には、そもそも「眞」は、どのように解釋されるのであろうか。

『説文解字』には「眞は、僊人、形を變えて天に登るなり。匕に从い目に从い乚に从う。八は乘載する所なり」（８上・匕）[2)]とある。

眞は僊人(仙人)として解釋されているが、「人目から隱れて」「乘り物に乘って」という説明は、あまりに分析的である。これは、神仙思想が確立してからの解釋であり、そもそも『莊子』のなかには僊人ということば自體がない。

清の徐灝の『説文解字注箋』には「『莊子』『列子』に始めて眞人の名が見え、始めて長生不死であって雲天に登るという説が出ているが、それは、やはり寓言に過ぎない」とある。そして、『莊子』や『列子』にそうした説が見えるので、そのため「後世では、道家思想と神僊思想をまとめて同じものとしてしまった」と解釋している[3]。

「眞」字について、試みに日本の言語學者の説を参照すると、たとえば加藤常賢氏は字音から説明し、「シン。この音は身體を顛倒させ頭を下にした意を表わす『顛』からきている。『テン』の音が『シン』に變わった」[4]とする。白川靜氏は、顛倒するだけではないとし、「舊字は眞に作り、匕と県とに從う。匕は化（化）の初文で死者、県は首の倒形、合せて顛死の人をいう」[5]と解釋する。

藤堂明保氏は、人が逆さまになった形、首を逆さまにした状態であるとするが、「首を逆にし、人をさかさにしたのであるから、穴を掘ってその中に犠牲とした人間、殉死者などを、さかさにして入れ、埋めることを表わした字である。後世の充塡の塡テンの字に、その原義がよく保存されている」[6]という。

なお、言語學者ではないが、大形徹氏は「『眞』は顛倒（轉倒）の意味で『顛死の象』とされる。わかりやすくいえば路傍で野垂れ死にした死者をいう。野垂れ死にというもっとも悲惨な死をあらわす語をもって理想的超越者とするところに、『莊子』の思想の眞面目を感じとることができる」[7]という。

このように、諸家は「眞」を顛死者、殉死者と解しているが、しかし、眞人を死者と考えることは困難である。では、「眞」は、どのように解釋するべきであろうか。

そもそも『莊子』「田子方」の「其の人と爲りや眞」に郭象が「無假なり」と注しているように[8]、また『淮南子』「俶眞訓」の篇題に高誘が「眞は實」と注しているように[9]、「眞」は「虚假ではない」「實である」[10]という意味を持っている。「實」は、『説文解字』に「富なり。宀に从い貫に从う。貫は貨貝なり」（7下・宀）[11]とされる。藤堂明保氏は、貫は「正しくは貫ではなく、田（または周）と貝とを含む。充實の實とは窒チツに近く、いっぱいにふさがる意で、眞の對轉に當たる。種子を實というのも、充實しているからである」[12]と解釋する。

そこで、「眞」の意味内容をさらにはっきりさせるため、「眞」を諧聲符とする諸字を檢討してみよう。

「鎮」[13]は、混亂をしずめたり、何かを重い金屬で壓することである。鎮壓や重壓の「壓」は、土で押さえて塞ぐことを示す。その意味から言っても、「鎮」には金屬で中身を隙間なく押し塞ぐという意味内容があり、それは、中身の方から見れば充實した感じがあることである。また、「塡」[14]も、穴を土で埋めてしっかりと塞ぐこととされ、「寘」[15]や「寘」[16]も同じ意味内容の字である。

「瞋」[17]は、目を見開くこと、すなわち目をその枠いっぱいに充實させて怒ることである。また「眒」と同じで、これは目を上下に最大限に伸ばして充實させることである。「嗔」[18]は、大きく口を開けて怒ること。「瞋」[19]は、聲が耳に盈ちていることであり、また、死者の耳の穴に玉を詰めてふさぐことである。その意味では「瑱」[20]と同じである。このように見てくれば、目・耳・口偏に眞を諧聲符と

する字は、いずれも身體の穴にエネルギーや物が滿ちみちている感じがあることが分かる。

この、穴を玉で塞ぐことについて、大形徹氏は、身體の急所や開口部を玉でおおうという葬法が西周墓の屍體にみえ、「『玉』を死者の九竅（目二・耳二・鼻孔二・口一と下半身二、あわせて九つの竅）すべてに玉を詰めることは實際におこなわれている。玉衣の中の遺體は、目の上に玉が置かれ、玉鼻塞で鼻孔をふさぎ、玉耳塞で耳をふさぎ、口には玉蟬などが入れられている」[21]という。

また、「齊物論」には「百骸九竅六藏賅りて存す、吾れ誰れをか親しむことを爲さん」[22]とあり、身體の穴や臓器は生まれた時からそれぞれの位置に自然に備わっており、我々の意識と關わりなく自然にうまく働いているのだという趣旨の思想がみえ、續けて「求めて其の情を得ると得ざるとの如きは、其の眞に益損することなし」[23]とあって、身體の構造や機能の「眞實」は我々がそのことを把握しようとしまいと變わらない、とされている。

そして「應帝王」には、「曰く、人皆な七竅あり、以て視聽食息す、此れ獨り有ることなし。嘗試に之を鑿たん、と。日に一竅を鑿ち、七日にして渾沌死せり」[24]とあり、人には目や耳、口などの七つの穴があり、その穴から見たり聞いたり食べたり呼吸したりしているが、それは自ら意識を働かせて行なっているのであり、それに對して、それらの穴がまったくない渾沌は、天然自然の働きにただそのまま任せているだけで、身體の中身は天然自然のエネルギーで充實しているものとして象徴されている。そこに自分から意識を働かせて見たり聞いたりできるようにと穴が開けられていくうちに、なかに詰まっていた天然自然の眞實のエネルギーが徐々に失われ、やがて空っぽになった、というわけである。

なお『老子』第52章には、「其の兌を塞ぎ、其の門を閉ざせば、終身勤れず」[25]とあり、少しの隙間もなく穴をしっかりと塞ぎ、天然自然で充實した中身を留めておけば、永遠に疲れずに安んじていられるのだということが見え、これと同じことは、第56章[26]にもみえ、このような記述を通して見える思想には、「眞」を諧聲符とする字に共通してみえた、中身が充實している、ということと同じことがうかがえる。

ちなみに『説文解字』段注には、「塡塞」を意味する字は本來「𡨦」と書くべきで、「𡨦」は「寒」とほぼ同じ、「寒は實なり」「實は富なり」[27]とある。また、これと同じような意味として用いられているものが『詩經』にもみえる。鄘風「定之方中」の「心を秉ること塞淵」の鄭箋には「塞は充實なり、淵は深なり」[28]とあり、邶風「燕燕」の「其の心は塞淵」の毛傳には「塞は瘞なり」[29]とある。このように、「塞」は中身が充實している意味として用いられている[30]。

「眞」を諧聲符とする字について、『説文解字』段注に「凡そ禛鎮瞋諃臀塡寘闐嗔滇鬒瑱顚愼字、皆眞を以て聲と爲し、多く充實の意に取る。其れ顚槇字は頂を以て義と爲す者、亦た充實・上升の意なり」[31]とある。すなわち段玉裁によれば、「眞」字を諧聲符とする字は、多くは充實の意味に著目したもので、「顚」「槇」という、頂きという字義のものも、充實や上升という意味がある。とすれば、「顚」は、ものの根本や先端まで中身がいっぱい詰まり、重くて顚倒しまうほど充實しているという方向の語と考えられる。

以上の檢討により、「眞」には中身が充實しているという意味がある。では、眞人についても、心身共に充實している、ということがいえるのであろうか。

2．眞人について

眞人は、『荘子』に多く見え（資料２参照）、『荘子』以前の文獻には、ほとんど見當たらない。『荘子』中で眞人が、特に集中して見えるのは内篇「大宗師」であり、たとえば、次のようなことが言われている。

眞人は、「寡しきにも逆らわず、成んなるにも雄らず、士を謨らず」[32]と、乏しかろうと富んでいようと、どんなあらゆる状況にも滿足し、わざわざ思慮をめぐらして現状を變えようとしない。ただありのままに任せるだけであり「高きに登るも慄れず、水に入るも濡れず、火に入るも熱からず」[33]と、なんの障碍もない。

眞人の知は「是れ知の能く道に登假するや、此くの若し」[34]と、窮極の境地に登り至っており、自分から積極的に知を働かせて何かをしようとせず、心は「是れをこれ心を以て道を捐てず、人を以て天を助けずと謂う」[35]と、自分から心を働かせて道から外れてしまうようなことをせず、人爲で天然自然を助長するようなこともしない。

「其の寢ぬるや夢みず、其の覺むるや憂いなく、其の食らうや甘しとせず、其の息するや深深たり」[36]と、寢ている時に夢を見ることも、目覺めている時に患うこともなく、人が嗜欲で食べたり、喉もとを使って呼吸を行なうこともせず、ただ自然のあり方に任せているだけである。

生死への執著がないから「其の出づるに訢ばず、其の入るに距まず」[37]と、生まれてきたことを喜ぶようなこともなく、死んでゆくことを拒んだりもしない。また、「喜怒は四時に通ず。物に與て宜しきを有ちて、其の極を知ることなし」[38]と、喜怒などの感情は、四季の變化のようにあるがままに任せ、あらゆる事物の適切なところに對應しているのである。

このような窮極の境地に到達している眞人のありさまは、「足らざるが若きも承けず。與乎として其れ觚なるも堅ならざるなり。張乎として、其れ虚なるも華ならざるなり」[39]と、なにか不足しているかのようにも見えるが、外から何も受け取らないで充實しているのである。ゆったりとして、羣れのなかに獨り突っ立っているかのようにも見えるが、それは無理にそうしているわけではない。廣々として、空虚で捉えどころがないようにも見えるが、なにも飾り立てたところがない。ただ自然にそうなっているだけなのである。

また眞人は、こうした超越した境地にいながら、世俗の世界とも關わった。たとえば「刑を以て體と爲し、禮を以て翼と爲し、知を以て時と爲し、德を以て循と爲す」[40]と、刑は身體にぴったりと身につけ、禮は補助のようなものとし、それらを自分から積極的に行なうようなことをせず、知や德は、もともと備え持ったものだけに從い、その時々の状況に適合させるだけであって、しかも「知を以て時と爲すとは、事に已むを得ざるなり」[41]と、知は物事が必ずそうなるという窮極のところに對應しているのである。そういうわけで、世俗のなかにいても、「天と人と相い勝たざる」[42]存在として、天然自然のあり方と、人としてのあり方とが、お互いにせめぎあわずに調和しているのである。

このような眞人の境地に至るための修行法については、「肢體を墮ち、聰明を黜け、形を離れ知を去りて大通に同ず。此れを坐忘と謂う」[43]と、身體や知惠などの一切を忘れ去り、大いなる道と一體になって、居ながらにして一切を忘れるとある。また、「大宗師」以外では「人間世」には「耳は聽くに止まり、

心は符に止まるも、氣なる者は虚にして物を待つ者なり。唯だ道は虚に集まる、虚とは心齋なり」[44]と、耳や心で聞かず氣によって聞き、人爲的なものをすべて取り除いて、何ものにもとらわれない虚の状態に至らせ、その空間に眞實の道を一杯留めておくことがみえる。

大宗師以外の篇から眞人について補足すると、たとえば「刻意」には、「能く純素を體する」[45]と、わずかな混じりけもない純粋で素朴なものと一體化しているとあり、「田子方」には、「知者も説くを得ず、美人も濫すを得ず」[46]と、どんな人であろうと、眞人をどうすることもできないのであるが、「天地に充滿し、既(ことごと)く以て人に與えて、己れ愈々有す」[47]と、眞人自體は天地に廣く充滿しており、すべてを人に與えながらも、ますます充實してゆくとされている。

また、「徐無鬼」には、「天を以て人を待ち、人を以て天に入れず」[48]とみえ、天然自然のあり方に從って人事を行なうのであるから、人のあり方を天然自然の境地に持ちこむようなことをしないのであり、「之を得るや生き、これを失うや死し、これを得るや死し、これを失うや生く」[49]と、死生得失は、それぞれのありのままに任せるだけだとされる。續いて「故に甚だしく親しむ所なく、甚だしく疏(うと)んずる所なく、德を抱き和を煬(あたた)めて、以て天下に順う」[50]と、だれかに特別に親しんだりうとんだりせず、本來もちあわせた眞實の德をしっかりと抱き、その天然自然の和やかさをあたためながら、天下のあるがままに任せて從ってゆくとある。そして、眞人は「古の博大眞人」[51]と、窮極の境地に到達していると表現される。

ちなみに、『黄帝内經素問』の上古天眞論篇には、眞人が、至人、聖人、賢人という4種の超越者のなかで一番始めに取り上げられている。「眞人なる者は、天地を提挈し、陰陽を把握し、精氣を呼吸し、獨り立ちて神を守り、肌肉は一の若し。故に能く壽は天地を敝い、終時有ること无し、此に其の道生ず」[52]と、眞人は天地を引っ提げ、陰陽を的確に捉え、精なる氣を呼吸し、他のものに依存せず獨り立って靈妙なる精神を守り、肌肉は純粋そのものである。そのため壽命は天地の長さを盡くして終わるときがないのであり、そこに眞人の道が生じるのだ、とされている。

このように、眞人は、主に、人のあり方として自分から意識を働かせて天然自然の本性を見失うことをせず、あらゆることをありのままに任せる、という内容の文脈に引用されている。天然自然、本性をすばらしいものとし、それを大切に留めて中身を眞實で充實させ、それが何ものにも壞されないのが眞人とされる。このようなことは、「眞」を諧聲符とする字に共通してみえた、中身が一杯に詰まって充實している、という方向とも一致している。

なお、『莊子』には、心や知を働かせないことがたびたび見えるが、それらには心が引き締まったように少しの隙間もなく、端々まで天然自然の純粋さが行き届いて充實しているという感じがある。この意味内容からすると、謹んで心の充實した状態を保つという意味の「愼」[53]に近い。

では、眞人は夢を見ないということは、どういうことか。

3．眞人と夢

(1) 夢の字義

まず、「夢」の字自體について見ておく。『説文解字』によると、「明らかならざるな

り。夕に从い瞢の省聲」（７上・夕）[54]とある。意符の「夕」は、「莫（夕方のこと）なり。月に从い、半ば見ゆ」（７上・夕）[55]とされ、月が出ているが、暗くて、眞實がはっきり見えないことである。また、「夢」と密接に關聯する「寤」は、「寐ねて覺むること有るなり。宀（べん）に从い㝵（だく）に从い夢の聲」（７下・穴）[56]とされる。寢ていながら覺めているのであるから、寢ることが徹底していない、眠りが充實していない状況のことであろう。

なお、ここで、言語學者の説を參照すると、たとえば加藤常賢氏は、夢の字音は「莫忠切」（ボウ）であるとし、「夢」の「夕」を除いた部分が聲符であるが、契・金文に「蔑（べつ）」がみえることを取り上げて説明し、「夢」の「夕」を除いた部分は、「『目の見えない』意味を表わす」[57]という。「蔑」については、藤堂明保氏は「眛マッと同じく、目がただれてよく見えないことであるが、見えない所をムリに見定める意を派生する」[58]としている。加藤常賢氏の解釋に戻ると、夢の「『説文解字』の「不明なり」の解釋に加えて、さらに、「朱駿聲が『按ずるに、夜の不明なり』と言うのが正しい。何となれば、この字は『夕』の意符に從うからである。要するに、『夢』字は『夜の暗い』が本義である」という。そして、「寤」は、「寢ていて目の前が明るくなるで、『ゆめ』の本字である。であるから説文に『寐ねて覺（目の前がぱっと明るくなる意）むるなり』とあるのである」[59]と解説する。

以上のことから、夢の字義を總體的にとらえると、ぼんやりとして眞實が見えない、充實した状態ではないという意味になる。見えているのは假りのもの、ということである。

(2) 眞人と夢

夢を見るということが、眞實が見えず、見えているのは假りのものだということであれば、夢を見ないということは、つねに眞實が見え、充實した状態であるということになる。

では眠り自體は、どのように解釋されるのであろうか。「齊物論」には「人は、眠っているときには魂が交わり、覺めているときには身心がはたらく」[60]とある。この眠りについて、晉の司馬彪は「精神、交錯するなり」[61]と注釋し、唐の成玄英は「世俗の凡人は、……その夢みて寐ぬるや、魂神妄りに緣（よ）りて交接す」[62]と解釋する。精神あるいは魂神が、外物と接觸して交わるから夢を見るというのである。

ところで、「魂交」の「交」を諧聲符とする字には「絞」[63]や「咬」があり、前者は紐を交差させてしめること、後者は上下の齒をぎゅっとかみしめるという意味である。また、「齩」[64]は、かじる、食いつくことであり、これらはすべて、外側から強い力を加えて、中身を壞すという感じがあることで共通する。したがって、このことから「魂交」について考えると、精神・魂神が外からぎゅっと絞られて、やがて中身が押しつぶされて壞されるという方向にとらえられそうである。それほど人の精神は、もろいものなのだということになるが、それと對比すれば、眞人は「魂交」しないのであり、内に精神が堅く守られ、外から何物にも絞められることも壞されることもないのである。つまり、精神は内にしっかりと詰まって充實していることになる。

『淮南子』「俶眞訓」には、「大宗師」と同じく「其の寢ぬるや夢みず、其の覺むるや憂えず」[65]という表現が見えるが、「夫れ聖人の心を用うるは、性に杖（よ）り神に依り、相扶けて終始を得」[66]と、この境地に至るのは聖人であるとされ、ここでは天然自然の本性と心の働きである精神が別物として意識され、互

いに持ち合って上手く終始するものとされている。ところが『荘子』に見える眞人は、もともと本性と精神とふたつに分けたものに立脚するのではなく、精神と渾然一體化した本性があるだけなので、ここと は違う考え方であり、また、假に精神を本性から分けてそれ自體で働かせれば、それは本性とは關係のない人爲とされるのである。

では、さまざまな夢を通して、眞人における夢の位置について見てみよう。

「齊物論」には、荘子が夢のなかで蝴蝶になった有名な話がある[67]。荘周は夢の中で一匹の蝴蝶となり自由に空を飛んでいたが、目が覺めると、自分は人間なのか、それとも蝴蝶が荘周となった夢を見ているのか、分からなくなった。蜂屋邦夫氏が「蝴蝶として存在しているときには、蝴蝶としてひらひら飛びまわればいい、荘周という一個の人間として存在しているときには、荘周として生きればいい、という『物化』の思想をあらわしている。したがって、夢と現實の區別は必要なく、夢を見ればその夢に生きればいい、というわけである」[68]と解釋するように、結局、夢を見ているときは、それを眞實とし、現實に身を置いているときは、それを眞實とし、自由自在に變化しあう物化の世界に生きればよいのだという考え方に至った。

だが、ここには夢と現實の區別がある。しかし、そもそも夢を見ない眞人にとっては夢と現實の區別もないのであり、物化の考え方とは一致しない。眞人は、夢と現實の區別をも超越した世界にいるのである。

また、『列子』「黄帝」には、黄帝が晝寢をして、現實とは全く違う世界の華胥氏という國に遊んだ話がある[69]。この世界は「其の國師長なく、自然なるのみ。其の民嗜欲なく、自然なるのみ。生を樂しむを知らず、死を惡むを知らず、故に夭殤なし。己を親しむを知らず、物を疎んずるを知らず、故に愛憎無し」と、人間界の身分の違いがなく、欲望や愛憎の感情がなく、死生に執著しない。それに「水に入るも溺れず、火に入るも熱けず」と、何も障碍がなく、「斫撻するも傷痛なく、指擿するも痟癢なし」と、切ったり張ったりしても身體は傷つかず、指で引っ掻いても摘んでも痛くも痒くもない。このようなあり様は、『荘子』の眞人と似ている。

ところが、「空に乘ずるも實を履むがごとく、虚に寢ぬるも牀に處るがごとし」と、空を自由に驅けたり横たわったりでき、「雲霧も其の視るを碆げず、雷霆も其の聽くを亂さず」と、視覺や聽覺の妨げもなく、ただ「神行のみ」と、魂で行き來する[70]とあり、さらに、夢を見た後に「今にして知る、至道は情を以て求むべからざるを」と、窮極の道は常識では得られないという眞實を悟ったとある。

このように、夢を見て、夢のなかで魂が自在に活動することによってしか眞理が得られないとすることは、『荘子』の眞人と夢の考え方には見えない思想である。『荘子』の眞人では夢を見ない状態こそが窮極の境地だとされており、そこに『荘子』の特色がある[71]。すなわち、眞人は「其の寢ぬるや夢みず、其の覺むるや憂い無し」[72]とあるように、寢ている間は寢ていることで充實し、覺めている間は覺めていることで充實しているのであり、つねに眞實で充實しているからこそ夢を見ないのである。

また、夢を見ないことは憂いがないことと並べられており、夢を見ることは憂いがあることと同じような意味だということになる。憂いがあるのは衆人の常であるが、衆人については「其の嗜欲の深き者は、其の天機も淺し」[73]と述べられている。それに對比して

考えれば、眞人は天機が深いのであり、つまり、自然の働きが發動する機縁が活發で充實しているので、夢を見たり憂いたりするようなことがないのである。夢も憂いも天機が淺いから起こるわけである。なお、眞人が夢を見ないことについては、郭象も「意想無きなり」[74]と注をつけており、心に意想がないから、晝間煩いがないのと同じように、寢ても夢を見ないのだとしている。

最後に、「大宗師」と同じ方向の文章をみておく。『列子』「周穆王」には、「神遇うを夢と爲し、形接わるを事と爲す、故に晝想い夜夢みるは、神形の遇う所なり。故に神凝(こ)る者は想・夢自ら消ゆ。覺を信ずるは悟らず、夢を信ずるは達せず、物化の往來する者なり」[75]とあり、目が覺めている晝にあれこれと物を想い、寢ている夜に夢を見るのは、精神や肉體が外物と出くわすためであるとされている。夢を見ることも、物を想うことも、萬物が變化して往來するような一つの相にすぎないというのである。そこで、つねに精神がしっかり固まっていれば、物を想うことも、夢を見ることもないのであり、この「凝」は本稿で想定した「眞」の意味に近い。

續いて「古の眞人は其の覺むるや自ら忘れ、其の寢ぬるや夢みず。幾(あ)に虛語ならん哉(や)」[76]とある。眞人が夢を見ないことについて、「大宗師」では憂いがないとあるのに對し、「周穆王」では自ら忘れるとあるが、兩者とも天然自然の本性に任せていることを意味しており、同じことを言ったものに他ならない。

結　語

本稿は夢と眞人の問題に焦點をあて、莊子の思想を分析した。まず右文説に據(よ)りながら「眞」字を分析し、「眞」には中身がぎっしり充實しているという意味があることを明らかにした。ついで「眞人」について考察し、「眞人」は『莊子』に特徴的な言葉であり、天然自然の本性を大切に留めて中身を眞實で充實させ、それが何ものにも壞されない存在であると把握した。その「眞人」と「夢」の關係については、まず「夢」の字義を總體的にとらえ、「夢」は、ぼんやりとして眞實が見えず、充實した状態ではないという意味であり、見えているのは假りのものだ、ということを明確にした。最後に、睡眠と覺醒、夢の關係を檢討し、「大宗師」の「古の眞人は、其の寢ぬるや夢みず、其の覺むるや憂い無し」という言明の本質を明らかにした。

そのようにして明確になった眞人なるものは、寢ているときは寢ていることで充實し、覺めているときは覺めていることで充實し、その本性は常に充實している。見えているものは眞實のみであり、夢を見ることによって眞理を得るようなこともない。眞人は夢を見ないのであり、夢と現實の區別をも超越した世界に生きる存在である。以上が『莊子』に見える「眞人は夢を見ない」ことについての考察である。

注

本論文内では、原則として舊字體を用いた。引用文等もそれによった。引用文が舊かなづかいで書かれているところ（ルビも含む）は、現代かなづかいに變更した。引用文には、必要に應じて、ルビを加えた。

1）朱駿聲『説文解字通訓定聲』坤部第16「眞」には「六經無眞字」とある。なお、「眞」の語は、道家系の文獻に頻出する。例えば『老子』

第21章の「其精甚眞（其の精甚だ眞）」、『列子』「力命」の「眞矣、慤矣（眞なり、慤なり）」、『淮南子』「覽冥訓」の「夫全性保眞（夫れ性を全くし眞を保ち）」等である。「眞人」の語は、『列子』『淮南子』『文子』『管子』等に見え、例えば『列子』「周穆王」に「古之眞人、其覺自忘、其寢不夢（古の眞人、其の覺むるや自ら忘れ、其の寢ぬるや夢みず）」、『淮南子』「俶眞訓」に「古之眞人立於天地之本、至優游、抱德煬和而萬物雜累焉（古の眞人は、天地の本に立ち、中、優游するに至り、德を抱き和を煬めて萬物と雜累す）」、『管子』「心術上」に「眞人言至人也（眞人は至人を言うなり）」等である。

2）『説文解字』８上･匕：眞、僊人變形而登天也。从匕从目从乚（音隱）、八、所乘載也。『説文解字』は、中華書局、2002年４月版を使用した。なお『楚辭』「九思・守思」の王逸注にも「眞、仙人也」とみえる。

3）徐灝箋『説文解字注箋』：然自莊・列始有眞人之名、始有長生不死而登雲天之説、亦寓言耳。後世由此遂合道家神僊爲一流。

4）加藤常賢『字源辭典』角川書店、1973年２月、404頁。

5）白川靜『字統』平凡社、1984年８月、472-473頁。

6）藤堂明保『漢字語源辭典』學燈社、1998年４月、743-744頁。

7）大形徹『魂のありか―中國古代の靈魂觀―』角川選書、2000年6月、149頁。

8）『莊子』「田子方」「其爲人也眞」郭注：眞、無假也。

9）『淮南子』「俶眞訓」篇題高注：俶、始也。眞、實也。

10）『玉篇』匕部：眞、不虛假也。『古今韻會擧要』眞韻：眞、實也、僞之反也。

11）『説文解字』７下・宀：實、富也。从宀从貫、貫貨貝也。（神質切）

12）藤堂明保『漢字語源辭典』（注６所引）、748頁。

13）『説文解字』14上･金：鎮、博壓也。从金眞聲。（陟刃切）

14）『説文解字』13下･土：塡、塞也从穴眞聲。（陟鄰切、今待季切）

15）『説文解字』７下･宀：寘、置也从宀眞聲。（支義切）

16）『説文解字』７下･穴：窴、塞也、从穴眞聲（待季切）。

17）『説文解字』４上･目：瞋、張目也。从目眞聲。（昌眞切）

18）『説文解字』２上･口：嗔、盛气也。从口眞聲。詩曰、振旅嗔嗔。（待年切）

19）『説文解字』１上・玉：瑱、以玉充耳也。从玉眞聲、詩曰、玉之瑱兮。（臣鉉等曰、今充耳字、更从玉旁充、非是。他甸切）瞋、瑱或从耳。

20）同上。注19参照。

21）大形徹『魂のありか―中國古代の靈魂觀―』角川選書、2000年６月（48-55頁）

22）「齊物論」：百骸、九竅、六藏、賅而存焉、吾誰與爲親。汝皆説之乎。其有私焉。如是皆有爲臣妾乎。其臣妾不足以相治乎。其遞相爲君臣乎。其有眞君存焉。如求得其情與不得、無益損乎其眞。

23）同上。注22參照。

24）「應帝王」：人皆有七竅、以視聽食息、此獨无有、嘗試鑿之、日鑿一竅、七日而渾沌死。

25）『老子』第52章：塞其兌、閉其門、終身不勤。開其兌、濟其事、終身不救。

26）『老子』第56章：塞其兌、閉其門。

27）『説文解字注』：𡨦、窒也。穴部曰、窒、𡨦也。此與土部塞、音同義異。與心部寒、音同義近。塞、隔也。隔、塞也。與𡨦窒訓別。寒、實也。實、富也。與𡨦窒訓近。凡塡塞字、皆當作𡨦。自塞行而𡨦・寒皆廢矣。从𡨦从㝉窒宀中、竦手擧物塡屋中也。从三字會意。

28）『詩經』鄘風「定之方中」「秉心塞淵」鄭箋：塞、充實也。淵、深也。なお、孔疏には「秉操其心、

能誠實且復深遠、是善人也」とある。

29)『詩經』邶風「燕燕」「其心塞淵」毛傳：塞、瘗；淵、深也。

30) なお、『荘子』中には純粋や眞實の意味で使われている「眞」があるが、それと同じような眞が『老子』にも見える。たとえば、「應帝王」には「其の德は甚だ眞（其德甚眞）」とあり、もともと備わった德は純粋で眞實であるとされるが、『老子』第40章の「質眞渝（かわ）るが若く（質眞若渝）」の「眞」には質實の德という意味が含まれており、「悳（とく）」と同じであるとされる（『説文解字』10下・心：悳、外得於人、内得於己也。从直从心。段注：俗字嘸德爲之、德者升也）。德が眞であるということは、第54章にも「其の德乃ち眞なり（其德乃眞）」とみえる。また「漁父」には「眞とは精誠の至りなり（眞者精誠之至也）」とあり、眞は眞誠や誠實、純粋さの極致であるとされるが、これと同じような内容の眞が、『老子』第21章に「其の精甚だ眞なり（其精甚眞）」としてみえる。

31)『説文解字』段注：凡禛鎮瞋諃臀塡竇闐嗔滇鬒瑱顚愼字、皆以眞爲聲、多取充實之意。其顚槙字以頂爲義者、亦充實上升之意也。

なお、沈兼士「右文説在訓詁學上之沿革及其推闡」、國立中央研究院『慶祝蔡元培先生六十五歲論文集』歷史語言研究所集刊外編第一種、下册、1935年１月、821-822頁參照。

32)「大宗師」：古之眞人、不逆寡、不雄成、不謨士。

33)「大宗師」：登高不慄、入水不濡、入火不熱。

34)「大宗師」：是知之能登假於道也若此。

35)「大宗師」：是之謂不以心捐道、不以人助天。

36)「大宗師」：古之眞人、其寢不夢、其覺无憂、其食不甘、其息深深。

37)「大宗師」：古之眞人、不知説生、不知惡死、其出不訢、其入不距。

38)「大宗師」：喜怒通四時、與物有宜而莫知其極。

39)「大宗師」：古之眞人、其狀義而不朋、若不足而不承。與乎其觚而不堅也、張乎其虛而不華也。

40)「大宗師」：以刑爲體、以禮爲翼、以知爲時、以德爲循。以刑爲體者、綽乎其殺也。

41)「大宗師」：以禮爲翼者、所以行於世也。以知爲時者、不得已於事也。

42)「大宗師」：天與人不相勝也、是之謂眞人。

43)「大宗師」：墮肢體、黜聰明、離形去知、同於大通、此謂坐忘。

44)「人間世」：无聽之以耳、而聽之以心、无聽之以心、而聽之以氣、耳止於聽、心止於符、氣也者虛而待物者也、唯道集虛、虛者心齋也。

45)「刻意」：能體純素、謂之眞人。

46)「田子方」：古之眞人、知者不得説、美人不得濫。

47)「田子方」：充滿天地、既以與人、己愈有。

48)「徐無鬼」：古之眞人、以天待人、不以人入天。

49)「徐無鬼」：古之眞人、得之也生、失之也死、得之也死、失之也生。

50)「徐無鬼」：故无所甚親、无所甚疏、抱德煬和以順天下、此謂眞人。

51)「天下」：古之博大眞人哉。

52)『黄帝内經素問』「上古天眞論篇第一」：黄帝曰、余聞上古有眞人者、提挈天地、把握陰陽①、呼吸精氣、獨立守神、肌肉若一②。故能壽敝天地、无有終時、此其道生③。

①）王冰注：眞人謂成道之人也。夫眞人之身、隱見莫測、其爲小也入於无間、其爲大也徧於空境、其變化也出入天地、内外莫見、迹順至眞、以表道成之證。凡如此者、故能提挈天地、把握陰陽也。

②）眞人心合於氣、氣合於神、神合於无。故呼吸精氣、獨立守神、肌膚若冰雪、綽約若處子。

③）體同於道、壽與道同、故能无有終時、而壽盡天地也。敝、盡也。

53)『説文解字』10下・心：愼、謹也。从心眞聲。（時刃切）

54)『説文解字』７上・夕：夢、不明也。从夕、瞢省聲。

55)『説文解字』７上・夕：夕、莫也。从月、半見。凡夕之屬、皆从夕。

56)『説文解字』７下・宀：寤、寐而有覺也。从宀从㝵夢聲。

57) 加藤常賢『漢字の起源』角川書店、1970年12月、848頁。

58) 藤堂明保『漢字語源辭典』（注６所引）、670頁。

59) 加藤常賢『漢字の起源』（注57所引）、849頁。

60)「齊物論」：其寐也魂交、其覺也形開。

61)『釋文』「魂交」：司馬云：精神交錯也。

62)「齊物論」「其寐也魂交、其覺也形開」成疏：凡鄙之人、……故其夢寐也、魂神妄緣而交接。

63)『説文解字』10下・交：絞、縊也。从交从糸。（古巧切）なお、『説文』無咬字。

なお、藤堂明保『漢字語源辭典』（注58所引、269頁）に「絞（ねじって締めつける）にきわめて近いのは、考覈コウカクという場合の覈である。ぎりぎりの所までしぼって、泥を吐かせたり事實を調べあげたりする意味である」とみえる。

64)『説文解字』２下・齒：齩、齧骨也。从齒交聲。（五巧切）

65)『淮南子』「俶眞訓」：是故其寐不夢、其覺不憂。

66)『淮南子』「俶眞訓」：夫聖人用心、杖性依神、相扶而得終始。

67)「齊物論」：昔者、莊周夢爲蝴蝶。栩栩然蝴蝶也。自喩適志與、不知周也。俄然覺、則蘧蘧然周也。不知周之夢爲蝴蝶與、蝴蝶之夢爲周與。周與蝴蝶、則必有分矣。此之謂物化。

68) 蜂屋邦夫「中國思想における夢」、『東京大學教養講座14　夢と人間』東京大學出版會、1986年7月、164-165頁。

69)『列子』「黄帝」：晝寢而夢、遊於華胥氏之國。華胥氏之國、在弇州之西、臺州之北、不知斯齊國幾千萬里。蓋非舟車足力之所及、神遊而已。其國無師長、自然而已。其民無嗜欲、自然而已。不知樂生、不知惡死、故無夭殤。不知親己、不知疎物、故無愛憎。不知背逆、不知向順、故無利害。都無所愛惜、都無所畏忌。入水不溺、入火不熱。斫撻無傷痛、指擿無痛癢。乘空如履實、寢虛若處牀。雲霧不碍其視、雷霆不亂其聽。美惡不滑其心、山谷不躓其步。神行而已。黄帝既寤、怡然自得。召天老力牧太山稽、告之曰、朕閒居三月、齋心服形、思有以養身治物之道、弗獲其術。疲而睡、所夢若此。今知、至道不可以情求矣。

70) 蜂屋邦夫「中國思想における夢」（注68所引）、157頁。

71) 鹽出雅「「眞人不夢」について―道家の夢―」（『武庫川國文』36號、武庫川女子大學、女子短期大學國文學會、1991年、102頁）に、「睡眠中であれ、覺醒時と同様に知覺することがあるのである。それであってこそ、『不夢』と『無憂』が對になる。とすれば、『夢みず』とは夢を見ないのではなく、夢を見ても覺醒時と同じく、『其の然かる所由を知』っているが故に、『怛るる所無し』、すなわちその夢を自然のあり方として感情を動かされることが無いのである。これが『眞人不夢』の意味であろう」とあるが、『莊子』本文には眞人は「夢をみない」と明言されているのであるから、行きすぎた解釋であろう。

また、大形徹氏は、夢は魂の働きによって見るのものであるとし、眞人は魂であるとして「眞人が『魂』そのものであるならば、夢を見ることはないのかもしれない」と述べている（注７所引、150頁）が、「魂そのものである」眞人が、その「魂の働き」を持たないという解釋は、理解しがたい。

72)「大宗師」：古之眞人、其寢不夢、其覺无憂。

73)「大宗師」：其耆欲深者、其天機淺。

74)『莊子』「大宗師」「古之眞人、其寢不夢」郭

注：無意想也。

75)『列子』「周穆王」：神遇爲夢、形接爲事。故晝想夜夢、神形所遇。故神凝者、想夢自消。信覺不悟、信夢不達。物化之往來者也。

76)『列子』「周穆王」：古之眞人、其覺自忘、其寢不夢。幾虛語哉①。

①）唐の殷敬順『釋文』に「幾虛、音豈」とある。

資料１　『莊子』に見える「眞」（ただし「眞人」を除く）

（　）内の數字は中華書局『莊子集釋』（1997年10月版）の頁數である。

＊印をつけた眞は副詞的用法（まことに、本當になど）のものである。

齊物論　若有眞宰（55）。
其有眞君存焉（56）。
無益損乎其眞（56）。
道惡乎隱而有眞僞（63）。

大宗師　且有眞人而後有眞知（226）。
亡身不眞（232）。
而人眞以爲勤行者也（234）。
而況其＊眞乎（241）。
而已反其眞（266）。

應帝王　其德甚眞（287）。

馬　蹄　此馬之眞性也（330）。

天　道　仁義、＊眞人之性也（478）。
極物之眞（486）。

天　運　古者謂是采眞之游（519）。

秋　水　是謂反其眞（591）。

達　生　民幾乎以其眞（638）。

山　木　眞泠禹曰（686）。
見利而忘其眞（695）。
游於栗林而忘眞（698）。

田子方　其爲人也眞（702）。
虛緣而葆眞（702）。
吾所學者眞土梗耳（703）。（『經典釋文』により直を眞に改めた。）
夫魏＊眞爲我累耳（703）。
是＊眞畫者也（719）。

知北游　彼无爲謂眞是也（731）。
彼其＊眞是也（734）。
＊眞其實知（738）。

則　陽　季眞之莫爲（916）。

讓　王　眞惡富貴也（971）。
道之＊眞以治身（971）。

盜　跖　皆以利惑其眞而強反其情性（997）。
非可以全眞也（1000）。
而義＊眞是也（1002）。
而信＊眞是也（1002）。

漁　父　苦心勞形以危其眞（1025）。
愼守其眞（1031）。
請問何謂眞（1031）。
眞者、精誠之至也（1032）。
眞悲无聲而哀（1032）。
眞怒未發而威（1032）。
眞親未笑而和（1032）。
眞在内者（1032）。
是所以貴眞也（1032）。
眞者、所以受于天也（1032）。
故聖人法天貴眞（1032）。
不知貴眞（1032）。

天　下　不離于眞、謂之至人（1066）。
墨子＊眞天下之好也（1080）。
以重言爲眞（1098）。

資料２　『莊子』に見える「眞人」

（　）内の數字は中華書局『莊子集釋』（1997年10月版）の頁數である。

大宗師　且有眞人而後有眞知（226）。
何謂眞人（226）。
古之眞人、不逆寡、不雄成、不謨士（226）。
古之眞人、其寢不夢、其覺无憂（228）。
眞人之息以踵、衆人之息以喉（228）。

古之眞人、不知説生、不知悪死（229）。
是之謂不以心捐道、不以人助天。是之謂眞人（229）。
古之眞人、其状義而不朋（234）。
天與人不相勝也、是之謂眞人（235）。

刻　意　能體純素、謂之眞人（546）。

田子方　古之眞人、知者不得説、美人不得濫（727）。

徐無鬼　久矣夫莫以眞人之言謦欬吾君之側乎（822）。
抱德煬和以順天下、此謂眞人（865）。
古之眞人、以天待（之）〔人〕（866）。
古之眞人、得之也生、失之也死（866）。

列御寇　夫免乎外内之刑者、唯眞人能之（1053）。

天　下　古之博大眞人哉（1098）。

参照文献

加藤常賢　1970. 12　『漢字の起源』　角川書店
――　1973. 2　『字源辭典』　角川書店
白川靜　1984. 8　『字統』　平凡社
藤堂明保　1998. 4　『漢字語源辭典』　學燈社
大形徹　2000. 6　『魂のありか―中國古代の靈魂觀―』　角川選書
蜂屋邦夫　1986. 7　「中國思想における夢」『東京大學教養講座14　夢と人間』　東京大學出版會
鹽出雅　1991.「「眞人不夢」について―道家の夢―」『武庫川國文』36號　武庫川女子大學、女子短期大學國文學會

付記

私が夢を通して中國の思想や文化を知ることに關心をもちはじめたのは蜂屋邦夫著「中國思想における夢」（『東京大學教養講座14　夢と人間』東京大學出版會・1986年７月）を讀んだことがきっかけですが、本稿の執筆にあたっても、逐一、蜂屋邦夫教授のご指導を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

コメント

古往近来、荘子の人物や思想、あるいは書物について論じた文章は無数に存在する。『荘子』中に見える真人や夢について論じたものも数多い。真人と夢を関連させて捉えたものも、けっして一、二篇ではない。しかし、『荘子』中に見える真人と夢を関連づけ、それを主として右文説を工具として論じたものは、管見の及ぶところ西林君の本論文が嚆矢であり、本論文はその点に特色がある。

右文説とは何か。許慎が『説文解字』で六書の体例を打ち出して以来、文字の学問はゆるやかに展開したが、清朝に至って大発展した。収録の文字数も『説文解字』では１万足らずであるが、『康熙字典』では４万に達する。文字の学問は音韻学と字義学の両面において精密の度を加え、右文説は、そうした趨勢のなかで形成された。

六書のうち大多数を占めるものは諧声（形声）文字である。諧声文字は意符の偏（冠や構えなどを含めて言っている）と音符（諧声符）の旁から構成される。意符と音符と言うように、普通には偏は意味を表わし、旁は音を表わすとされる。しかし、言葉として大事な意味は、むしろ旁にあるのではないか、というのが、ごく簡単に言った場合の右文説の考え方である。たとえば經・徑・頸・莖など「巠」を諧声符とする文字は「ピンと伸びた」感じを持つというように。旁は通常右にあり、それを重視するから右文説という。すでに段玉裁の『説文解字注』にかなりの程度でその考え方が認められ、民国にいたって沈兼士らが大成した。

昔、私が大学生だった頃は欧米の思想に関心を持っていたが、大学院に進むあたりから中国の思想に関心が移っていった。より正確に言えば、中国的発想、中国的思考と言うべき問題で、つまり中国人の考え方である。これは当時そうした問題に開眼させてくれた東大教養学部工藤篁教授の影響によるが、中国人の考え方という掴み所のない問題を前にして、分析方法の一つとしたものが右文説である。私の第一論文は「中国的心性について」という題名であるが、その時に拠った方法論の一部を西林君に伝授し、西林君が第一論文としてまとめ上げたものが本論文である。

真の字を感覚的に捉えた場合、充実感が核心になるのではないか、というのは私の長年の見解である。右文説は行きすぎると牽強付会に陥るが、西林君はそれをバランスよく工具として使って真字を分析し、私の指示によく応えてまとめ上げてくれた。行論の全体について指導教授として逐一検討したので、ここで「評」を下すのは自家撞着以外の何物でもない。よって、いささか右文説を説明し、往事を回想して責めを塞いだ。

（蜂屋　邦夫 記）